



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

三浦, 國雄

CITATION:

三浦, 國雄. はじめに. 人文學報 2002, 86: 1-2

ISSUE DATE:

2002-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48593>

RIGHT:

はじめに

班 長 三 浦 國 雄

もともと「媒介」というアイデアは横山俊夫氏が年来温めてきたもので、これを梃子にして東アジア世界の日常的営為を捉え直す研究班を発足させたい旨の相談をご当人と藤井譲治氏から受けた時、班長という大役はともかく、そのテーマ自体は実に興味深いと相槌を打った記憶がある。実際、東アジアの旧社会では媒酌が居なければ男女の恋愛、結婚もままならなかったわけだし、中国の煉丹術（内丹であれ外丹であれ）でも媒介者「黄婆」は丹の煉成に不可欠の存在であった。まことに繋ぐものが居なければ何事も始まらないし動かない。

私としてはそういうこともさることながら、横山氏の意図をややずらせてこれを虚実や主客の問題として受け止めれば面白かろうと思い、それ以上深くは考えないで承諾したのが大まかな事の経緯であった。

これは以前『人文学報』の彙報欄に書いたことだが、基本的には今もあまり変わっていないので殆どそのまま再録することを許されたい。

本研究班では、存在（ひと・こと・もの）をそれ自体として孤立的に捉える見方を排し、存在を存在者と媒介者に開いた上で、実としての存在者を成り立たせる虚としての媒介者に注目し、その視点から東アジアの社会と日常を見直したいと考えている。このような視点の設定によって、媒介者（客）が存在者（主）となり存在者が媒介者に転じるという、虚実の定まらないアジア的曼陀羅の世界をよりダイナミックに捉えうるのではあるまいか。

私としては更に歩を進めて、「間」の問題とも絡めながら、所謂近代的自我に対するアジア的自我のようなものへ展開できればと漠然と考えていた。

上に述べたことは、もとより私個人の関心であって、班員諸氏の捉え方はもっと多様であった。研究会は「媒介」とは何かという正面からの本質論議を避け、各位それぞれの研究テーマを持ち寄って「媒介」の観点から見直していくという形で進めて行った。1994年4月から97年3月に至る3年間、月2回のペースで開かれた研究会は夥しい数に上るが、そのつど「媒介」に関する新しい発見があった。その全てを結集できなかったのは残念であるが、ここに集められた諸論考は一見脈絡がなさそうに見えながら、実はその底に「媒介」の太い流れが脈打っていることを見逃さないでいただきたい。

なお、研究発表と平行して、『簠簋内伝冠註大全』等に導かれながら『簠簋内伝』を会読したことも記録に留めておきたい。

結びに言う、私たちの研究班は、このかなり遅ればせの論集刊行をもってひとまずお開きとなるが、「媒介」なるテーマは班員各位の胸中でなお鳴り続けてゆくはずである。

2002年1月14日